# 現代に生きる先住民族の文化
# ーサーミとアイヌを事例にー

学籍番号　47-096753
氏　　名　白水 はるか（Shiramizu, Haruka）
指導教員　鬼頭 秀一 教授

## 1. 問題関心・研究目的

長年にわたる同化政策の影響や、社会的状況の変化などによって、多数派民族と変わらない生活を送る先住民族の人々は数多く存在し、今後もますます増えていくことが予想される。ライフスタイルの同質化だけでなく、同化政策によって言語も奪われ、また、多数派民族との婚姻も進み、「先住民族」と「多数派民族」という境界線を引くことがほとんど意味をなさなくなっているような今日の状況において、彼らはどのような活動を通して独自の文化やアイデンティティを継承しているのだろうか。加えて、「自然と共生する人々」と言われる所以である、自然と深いつながりのある伝統的生業を行っていない現在において、先住民族の文化の拠り所ともいえる自然的要素は、例えばアイヌの熊のイオマンテ（熊のカムイの魂を送る儀式）などの特別な行事の外では、もはや失われてしまったのだろうか。

## 2. 研究対象

本研究では、ノルウェーのサーミと日本のアイヌを研究対象とする。ノルウェーは IL0169 号条約という先住民族の権利について明確に定めている条約を 1989 年に批准した最初の国であり、サーミ議会の設立や一部の公立学校でのサーミ語教室開設、一部の行政区のノルウェー語とサーミ語での運営、サーミ幼稚園の設置を行うなど、先住民族政策は進んでいる。一方で、日本は同条約の批准はしておらず、2008 年にようやくアイヌを先住民族として認めたばかりで、法的な整備は十分とはいえない。しかし、近年、特にアイヌに関する唯一の法律だった旧土人保護法（1899 年）が 1997 年に廃止され、「アイヌ文化振興法」が制定されてからは、文化復興運動の動きが盛んになってきたといえる。

サーミに関しては、2010 年 1 月から 12 月まで先住民族研究に力を入れている大学のあるノルウェーの北部トロムソという街を拠点に、文献調査や聞き取りを行った。アイヌに関しては 2011 年 6 月から 8 月まで、合計 3 回に渡って札幌、白老、二風谷で現地調査を行い、その後は東京のアイヌを中心に聞き取りを行った。

## 3. サーミ

### 3.1 サーミの先住民族運動概略

ノルウェーにおける同化政策は、世界的なナショナリズムの流れとともに 1800 年代中頃から始まった。戦後、ナチス軍の侵攻で破壊的な打撃を受けた北部は、復興政策によってインフラや住居の整備が政府主導で行われ、生活スタイルのノルウェー化が急速に進み、サーミの伝統的な家や暮らしはさらなる打撃を受けた。

権利運動が本格的に始まったのは 1950 年代で、1979 年にノルウェー北部の Alta における水力発電所建設の反対運動が起きたことで、政府がサーミの権利回復を重要な政治的課題として認識す

る。1989 年には政府が ILO169 号条約を批准し、サーミの代表機関であるサーミ議会を設置するなど、サーミ政策を充実させた。

1990 年頃まではサーミの権利運動は Sámi elite という、サーミの政治家や研究者などによって主導され、様々な地域に住むサーミの文化的多様性を乗り越えたサーミの連帯（Pan Sámi）によって成果がもたらされたが、1990 年代以降は、激しい差別の時代を知らない、大学教育を受けた若いサーミ達が、彼らの地元で草の根運動の形で始めた文化復興運動が盛り上がりを見せるようになる。

### 3.2.サーミの文化復興運動

サーミでトナカイ放牧をしている人々はごく一部で、その他の生業を営んでいる人々の方が圧倒的に多く、地域や生業によって多様性が存在する。サーミの多様性を認識するための試みとして、近年ノルウェー各地で若いサーミによる地域密着型の音楽フェスティバルが開催されている。例えば、トナカイ放牧をする Reindeer-Sámi と比べると「マイナー」な Forest-Sámi の若者達は、Márkomeannu というフェスティバルを主催しており、開催地周辺では農業や牧畜を営んでいる人が多い。

Márkomeannu では、他のサーミのフェスティバルと差別化し、自分たちの地域性を出すために、シンボルに牛やゴム長靴を選び、コンサート会場には農機具などが配置されている。会場は木々や川に囲まれた広い土地が選ばれており、その中で、自然の事物がモチーフのヨイクというサーミの伝統的な歌をメインとしたコンサートを開くことで、彼らの文化と自然とのつながりが表されている。また、フェスティバル会場では、ごみの分別やコップのリユースなどが行われており、自然環境に配慮した運営がされているが、それは現代のサーミが環境問題を意識していることを表現しているという。

このフェスティバルの初期のリーダーの S さん（30 代）に、サーミの伝統文化で日常的に残っているものを聞いたところ、「体の調子が悪い時、healer に診てもらう事がある。例えば歯が痛い時、healer のところに行くと、水に何かおまじないをしてくれるから、それを飲むと治るんだ。あと、痛い部分に手を当ててもらったり、自分はやったことはないけど、血を少量抜いてもらったり、怪我をした時は血を止めてもらうこともある」という。普段はノルウェー人とまったく変わらない生活をし、ノルウェーとデンマークの大学で文学を学んだ彼が、そのようなことを話したのは正直意外だったが、サーミの住む地域では広くこの伝統的な healing がおこなわれていることはサーミの人々の間では知られており、独特の精神文化が受け継がれていることがわかった。

## 4.アイヌ

### 4.1. アイヌの先住民族運動概略

日本における同化政策は、明治政府が 1869 年に開拓使を設けてから本格化する。アイヌの農民化、入れ墨や仕掛け弓などのアイヌの習俗の禁止、日本語習得の義務化、創氏改名、アイヌの地の官有地への組み入れなどの政策によりアイヌの生活が困窮したため、その救済を目的に 1899 年（明治 32）に「北海道旧土人保護法」が制定され、農業従事希望者への土地の給付（多くが農業不適地）などが行われた。権利運動は 1970 年代に盛んになり、1994 年に萱野茂氏が参議院議員にアイヌとして初めて当選し、1997 年に「アイヌ文化振興法」が制定される。この法律は単に「アイヌ文化」の振興策を謳ったものに過ぎず、不十分なものであるが、この十年ほどの間にアイヌ文化の振興が進んだとの評価もある。

### 4.2.アイヌの文化復興運動

現在北海道では文化振興法に基づき、国と道が主導するイオル再生事業が行われている。アイヌ文化の継承に必要な自然素材の育成と活用を伝統的な方法で行い、その空間の再生を目指しているが、土地開発による資源の減少や土地の権利などから材料調達が困難となっている。問題は様々

あるが、事業にかかわっているアイヌの人々には、地域の自然環境や文化資源を見直し、伝統文化を学ぶよい機会となっている。また、事業の枠の外においても、人と人とのつながりによって文化は受け継がれている。アイヌ文化を支える自然環境が身近にない都市に住むアイヌの人々は、踊りや歌に加えて、アイヌの古老から直接聞いた世界観や倫理観、物語も伝承しており、それが文化伝承の重要な要素となっている。アイヌの世界観に感銘を受け、それが活動の原動力となっている人も少なくない。アイヌの世界観をモチーフとした版画を作ったり、アイヌのバンドを率いたりしているＹさんは、現代のアイヌや主流社会の人々にアイヌの世界観を伝えるのは、物語が一番有効な手段だと考えており、「七五郎沢の狐」というアニメーションのプロジェクトを進めている。これは、医療廃棄物が大量に運び込まれている函館市七五郎沢一般廃棄物最終処分場を舞台に、狐のカムイが「森のないところ 沢のないところ ゴミの埋められた大地に命の続くことはない」と悲しく語る創作ユカラである。また、近年、民間レベルで、自然を介した和人との協働も始まっている。二風谷ダムの近くの山を会員の寄付と会費によって買い取り、アイヌ文化に必要な木々を植える取り組みを行っているナショナルトラストNPO法人チコロナイや、ワイルドサーモンの遡上する小さな川の上流にある産業廃棄物施設に反対し、その川を管理する権利をアイヌに戻すように訴えている紋別のモペッ・サンクチュアリ・ネットワークなどがある。

## 5.考察

現代を生きるサーミとアイヌの人々は、長年に渡る権利運動を経て、現在は様々な形で文化復興活動を行っている。先住民族運動には、まず、政府や国民、そして国際社会に権利を訴えるという対外的な運動、すなわち、社会的公正を求める運動や、同胞や仲間となる人をつないでいくという、社会的関係を見いだすことができる。

また、一見すると我々と何も変わらない現代的生活を送っている先住民族の人々にも、独特の精神文化が受け継がれていることもわかった。サーミにおいては伝統的なhealingが未だに受け継がれており、「現実世界は目に見える物質的な次元と、目に見えない、精神的な次元に別れている」「病気の原因は様々な力（死者や、地域ごとに信じられている超自然的な性格を持ったもの）との不調和やバランスの崩れ、他人のまじないである」という伝統的な世界観がhealingの前提となっている。また、サーミの人々が住むエリアでは道路端に特別な形をした岩があると、その上には旅の安全を願ってコインが置いてあることがある（昔はトナカイなどの捧げものだった)。

アイヌにおいては、伝統的な世界観や自然観は、歌や踊り、物語、そして人々の語りから受け継がれている。アイヌの人がアイヌ文化を語る際にしばしば例に挙げるのが、アイヌ語のイランカラプテ（irankarapte）という言葉である。これは、日本語の「こんにちは」にあたる挨拶だが、「あなたの心にそっと触れさせていただきます」という実に繊細な意味を含んでいる。

また、イナウは木弊と訳されるが、イナウの持つ意味はもっと深く複雑で、アイヌの世界観を学ばなければ理解することはできない。このイナウはカムイノミ（儀礼）では必須のものであり、その意味を理解している必要がある。張りつめた静寂と、炉のパチパチという小さな火の音、そして静かにアペフチカムイ（火の神）などの様々なカムイに感謝するエカシの静かな祈りの言葉、その後、イナウにみかんなどの捧げものを手で丁寧に小さくちぎりながら祈る人々。祈りの儀式は主に日本語で行われており、全てが完璧に受け継がれているわけではいないが、そこにある精神世界は、アイヌ独特のものであることがうかがえる。また、自然の中でも、アイヌの自然観は受け継がれている。「アイヌがうまいと思うものは、鳥やけものだって同じ」というように、人間以外の動物たちのために食べものを残しておくという謙虚でやさしい考え方は、今でも一部で受け継がれている。ミミズを怖がる女性に対して、「私たちのために

一所懸命育てているものをばかにしてはいけない。踏んだり寄せたりしてもいけない。その場にいるのがこの人の役割だから、この人の場所を移動させてはいけない」というのも、同じように、人間が他の生き物との関係の中で生きているということを表している。「地面というものは人間が汚した水をきれいにしてくれるし、無視や草花を養っている、温かい温泉も地面から沸き出してくる。だから地面というものは生き物なんだ！」というように、大地を生き物だとする考え方は、現代の人々にも語り継がれている。

そして、先住民族の人々の活動の中には、従来の先住民族研究で描写されるようなトナカイや熊のイオマンテ（熊のカムイを送る儀式）といった、わかりやすい「自然」ではなく、現代的に意味づけされた、新たな自然的要素が見いだせることがわかった。若いサーミの人々は地元密着型の音楽フェスティバルにより、地域の伝統的な生業（農業や牧畜など）や自然を見直し、地域の自然と文化の多様性の中に、自然的要素を見いだしていた。Field-Sámi の村の主な収入源は長い間農業だったが、近年、それは公的サービスやその他のサービス業へと移ってきており、若い人々で農業に就いている人は少ない。しかし、サーミの音楽フェスティバルのテーマとして、地元の生業である農業と牧畜に注目することは、自然とのかかわりが深い先住民族だったことを表しており、自然的要素が先住民族としてのアイデンティティの拠り所になっているといえる。

アイヌの人々は、イオル再生事業という伝統的で固定的な自然とのかかわり方を継承する活動に加え、民間でも、ナショナルトラストによりアイヌの文化継承に必要な木を植えたり、産業廃棄物処理場に反対する運動をしている。自然との直接的なかかわりを取り戻そうとするこれらの活動が主に 60 代のアイヌの人々によって行われている一方で、若いアイヌの人々は、踊りや歌などで自然界の様々な生き物やカムイを想像し、身体的に自然を表現することで、自然との精神的なつながりを感じているようである。

このように、現代を生きる先住民族の人々の生き方に沿って捉えられ、実践されている自然的要素は、権利運動や文化復興運動に密接に関わっており、先住民族としてのアイデンティティの拠り所となっているといえる。

サーミとアイヌの先住民族運動を概観すると、以上のように、権利運動などの社会的側面、精神文化などの精神的側面、そして自然的側面という三つの側面にわけられ、それはガタリ（1991）の指摘する「三つの環境」として考えることができる。ガタリは三つの環境を統合的に捉える必要性があるといい、これらを統合した領域は「美的−倫理的」な性質があるという。先住民族運動の三つの側面が統合した領域、すなわち三つの環境に共通する領域である「美的−倫理的領域」とは、伝統文化活動を通して、自然や、人とのつながり、世界観に感動すること、そして、過去から引き継いだ自然、人とのつながり、世界観を次世代に繋ぐ責任感といえる。先住民族運動には、自然的環境、社会的環境、精神的環境の三つの側面があり、それぞれに「環境持続性」「社会的公正」「存在の豊かさ」が認められることがわかった。そしてそれらがばらばらではなくて、統合された中に、エネルギーや倫理観が存在しており、先住民族運動には環境倫理的意味や社会的意味があるといえる。また、現在の比較的若いサーミやアイヌの人々は、アイデンティティにゆらぎがあり、先住民族と多数派をつなぐ存在となっている。彼らが受け継ぐ世界観や自然とのかかわりを多数派の人々と共有していくことで、自然環境保全につながっていく可能性がある。そして多数派の人々も、先ほどの三つの環境の中に入り込んでいくことで、さらに先住民族運動は前進し、先住民族の人々も、その他の少数民族の人々も、多数派の人々も、そして動物や植物や神々までもが、いきいきと生きることのできる社会を創っていけるのではないだろうか。

**7. 参考文献**

ガタリ, F., 杉村昌昭訳, 1991, 『三つのエコロジー』大村書店.